

解

說

1 永享五年三月二十七日足利義教邸歌会

本歌会の詠草が、静嘉堂文庫蔵『瑠璃壺百首』A82・34Vに合綴されてゐることを発見されたのは、井上宗雄氏（『中世歌壇史の研究』南北朝期）A明治書院II昭40・11V）である。該本は、『瑠璃壺百首』『秋日陪 巖島明神宝前同詠三十三首和歌附小序』『普広院殿初度御会和歌（本書）』『永正元年八月二十五日月次和歌御会』『享祿四年十月二十五日月次和歌御会』『摂州畑天満宮法楽永正十一年初秋日』『詠三十首和歌 永正九年月日（道堅・公条・政為）』『永正八年十二月二十日（歌会）』『詠百首和歌（堯然）』を合綴。出詠歌人は兼良の他、満輔・持基・義教・公冬・公保・実熙・実量・雅世・宗継・兼郷・定親・実雅・雅永・為之・雅親・為季らであつた。題者は雅世、講師は公保、講師が為清と、かなりの盛儀といへよう。なほ卷末に、

右一卷普広院殿義教公初度御会和

歌也以栄雅之真跡書写之尤為珍書欵

天和元年蠟月

とあるが、この「栄雅（『雅親』之真跡）」は、『竹柏園藏書志』に「永享五年和歌会詠 一軸 左相府書閣歌会の詠にて、菅原為清の序、兼良をはじめ人々の詠あり。奥に、飛鳥井雅親の筆なるよし、慶安三年、古筆了左の極書あり」（281～282頁）とみえるものか。竹柏園本は所在不明。

2 永享百首

本百首の成立過程については、井上宗雄氏『中世歌壇史の研究』前編（風間書房II昭36・12）110～113頁に詳述されてゐる。なほ私に若干追補しつつ、簡単に述べておかう。

人数が決つた時は、正確には分らないが、醍醐寺座主満濟は題を永享五年九月二十一日にうけとつてゐる〔満濟准后日記〕ので、その日かそれ以前といふことになる。貞成親王（伏見宮、道欽）は翌二十二日にこのことを知つた〔看聞御記〕。同日条に、人数四十一名が見える。今、部類して示すと、次のやうになる。

〔皇族〕後花園天皇・後小松院・道欽・常盤井宮・玉河宮

〔公卿〕九条満輔・二条満基・一条兼良・足利義教・三条公冬・洞院満季（浄道）・北畠大納言入道（未詳）・小倉公種（性脩）

三条西公保・西園寺公名・洞院実熙・三条実量・法性寺二位入道（親信？）・飛鳥井雅世・松木宗継・広橋兼郷・正親町三条実

雅・中山定親・中院宰相中将入道（未詳）

〔殿上人〕飛鳥井雅永・冷泉為之・細川持之・飛鳥井雅親・法性寺為季（途四條隆直）

〔女房〕三条実冬女

〔法親王・僧侶・門跡〕永助法親王・道朝法親王・承道法親王・常住院准后・聖護院准后・三宝院満濟・大乘院

大僧正・実相院義運・竹中僧正・宝池院大僧正・常光院堯孝

以上の詠草が現存してゐれば、四千百首の大事業であつた。

〔将又御百首年内可詠進〕〔看聞御記〕永享五年十二月十七日条といふことであつたが、後小松院の不予・崩御（十月二十日）〔後小松院崩御記〕〔看聞御記〕〔満濟准后日記〕等〕などの理由で遅延し、後崇光院が高檀紙二十枚に清書したのは、翌六年四月四日であつた。披露は同月十九日だから、兼良の百首もその頃までに完成してゐたはずである。本書では、一応成立を永享五年と考へた。

伝本は、八五人本系統Ⅴと八十人本系統Ⅵに大別される。

Ⅰ 五人本系統Ⅱ後花園院百首

①内閣文庫蔵本ハ201・317Ⅴ 江戸中期写。

②宮内庁書陵部蔵「詠百首和歌」本入伏・45V 江戸中期写。

③神宮文庫蔵本入3・696V 林崎文庫旧蔵。村井古巖奉納本。江戸初期写。

④続群書類従所収本

⑤列聖全集本（御製集四）後花園院百首のみ。

II 十人本系統II永享百首

⑥『百首部類』本 諸所に蔵される。本書では、国会図書館蔵三冊本入202・74Vを底本にした。

⑦京都在学文学部陳列館古文書室蔵本入仮725・通11・1961V 勸修寺家旧蔵。江戸中期写。未見。本書

は山崎桂子氏の調査によつた。

なほ、『国書総目録』はIの伝本として、

宮内庁書陵部蔵「後花園院御百首部類」本入506・72V

を掲げるが、これは、後花園院の諸百首の歌題集成であつて、別本である。

五人本と十人本の作者は、次の通り。

	後花園院	貞常親王	持基	兼良	義教	公冬	隆直	公種	公保	公名
五人本	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
十人本	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

本書では、広本にあたる⑥を底本とし、Iの諸本を以つて校合した。

〔注〕『看聞御記』には見えない。

3 永享六年十月一日宋雅七回忌品経歌

本品経歌は、『釈教歌詠全集』四にも翻刻がある。底本にしたのは、

宮内庁書陵部蔵『品経和歌』Λ501・816V 題簽靈元天皇宸筆。江戸初期写。

この時の出詠歌人は、義教・公条・成邦王・周元・浄喜・性脩・公保・実量・宗継・言兼・実雅・定親・寂光・正綱・持之・雅永・為之・雅親・前阿波守源義忠・性具・堯孝・義運・満意・尊経・満濟・雅世・重賢と兼良の二十八人である。成立は、『品経和歌』の識語によつて、知ることができる。

永享六年十月一日中納言入道宋雅七回忌飛鳥

井中納言雅世卿勸進之

4 永享六年十二月二十一日新玉津島社法楽歌

本法楽歌については、井上宗雄氏『中世歌壇史の研究(籌前期)』(以下『室町前期』と略)に詳述されてゐる。

永享六年二月の大火で常光院及びその境内の新玉津島社が焼け、十一月廿九日造営されたが、義教はこれに法楽歌を勸進した。(中略)卅首歌で、公武僧の人々が詠進、十二月廿一日室町邸で披講された。その詠草は残っていないようであるが、堯孝の新玉津島社法楽卅首歌(片玉集23に両篇所収、両篇の内何れか)、前述の冷泉為之の玉津島宝前卅首和歌(東山御文庫蔵)などはこの時のものであろうか。(119頁)

今少し補足すると、義教は十月二十二日に勸進を決意、後崇光院は十一月十六日に「草案一卷」を完成させ、二十二日に雅世(奉行?)にわたした。披講は、各人三十首の内巻頭の一首のみだつたらしく、その日の内に奉納された。人数は、持基・実雅・聖護院義観・実相院・宝池院・後崇光院(≡貞成・満濟らであつた。

ところで、『新統古今集』には、この折の詠草と思しきものが八首見える。その認定基準は、(1)左大臣(義教)勸進の新玉津島社三十首である(2)永享六年現在生存の歌人、の二点である。歌人と所在は以下の通り。

公保Ⅱ春上・113、堯孝Ⅱ春下・168、兼良Ⅱ夏・305、為之Ⅱ冬・695、堯孝Ⅱ羈旅・962、実雅Ⅱ恋二・1177、義教Ⅱ恋二・1183、実量Ⅱ恋三・1246

底本にした兼右本は、「流布本と若干相違し、詞書や本文に、流布本の誤脱・誤膠を補訂できる」(稲田利徳氏『新統古今集』の第一次奏覧本について——精撰の熱意——)△『国語国文』昭46・10▽)系統の伝本である。

5 室町亭行幸和歌(永享九年十月二十二日)

永享九年十月二十一日、後花園天皇は、室町御所に方違のため行幸された。この間のことは、『室町殿行幸記』『永享九年十月二十一日行幸記』(共に類従)に詳しく、『看聞御記』『蔭涼軒日録』『碧山日録』『異本長者補任』『武家年代記』『如是院年代記』『南方紀伝』『後鑑』等に記事が見える。

二十二日、観舞の後和歌御会があつた。人数は、持基・兼良・義教・公冬・信宗・房平・公保・実量・雅世・宗繼・実雅・定親・雅永・持康・資親・実勝・資任・雅親・為季・公綱。二十三日も観舞、二十四日はこれといつたこともなかつた。二十五日、昼に蹴鞠があり、夜になって三船御会があつた。三船にわかれた顔ぶれは、

(和歌舟) 義教・房平・公保・実量・雅世・実雅・公綱

(詩舟) 持基・兼良・公冬・房嗣・時房・持通・為清

(管絃舟) 実熙・基秀・宗繼・定親・秀保・隆盛・実郷・有俊

といつた面々である。兼良は真名序を草し、末尾に一首を加へてゐる。

底本にした高松官本(写真版による)は、以上の二会の詠草・漢詩を抄したものである。他に、宮内庁書陵部本 \wedge 501・291Vがある。これに、漢文日記の加はつたものが、『室町殿行幸記』である、なほ、尊経閣文庫蔵本 \wedge 7・13Vの上冊奥書に、

本五

永禄八年八月廿八日以禁裏御本書写了 卜部 兼右判

天正十六年二月吉田左衛門督本令書写加校合者也

と見える「禁裏御本」は、正本かと思はれる。

6 永享十年二月二十八日宮中歌会始

本歌会については、『看聞御記』『薩戒記』『管見記』『統史愚抄』等に記事が見える。底本は、

宮内庁書陵部蔵『禁裏御会和歌永享十年』 \wedge 501・290V 江戸初期写。

なほ底本には、本歌会以外に、四月十日・四月二十八日・五月十日・五月十九日の詠草が収められてゐるが、兼良は出詠してゐない。

人数は兼良の他に、持基・義教・公冬・房嗣・信宗・房平・公保・公名・実量・持道・雅世・宗継・実雅・定親・為清・資親・雅永・持康・実勝・資任・雅親・為季・公綱ら。

7 『新統古今集』所収歌

兼良は、『新統古今集』に九首入集してゐる。その内七首は『永享百首』(1→2)から、一首は永享六年新玉津島社法楽歌(1→4)からとられ、従つて、出典未詳歌は一首のみである。底本は兼右本(4参照)。

なほ、『新統古今集』の成立過程については、吉沢義則氏『室町文学史』(東京堂 \parallel 昭11・12)『室町前期』等に詳述

されてゐる。

兼良は、『新統古今集』の両序を草した。これは、最も早い時期の八歌論Vと考へられる。従来流布本の本文を以て論じられて来た(例へば、後藤重郎氏「新統古今集序に関する一考察」△『中世文学』第7号=昭37・6V)が、稲田利徳氏が第一次奏覧本と思はれる天理図書館蔵伝後崇光院筆本△911・25・イ19、上巻のみVを紹介され(前掲論文、4参照)、大幅な異同のあることを報告された。稲田氏も部分的に翻刻されたが、両序すべての翻刻は、いまだなされてゐない。そこで、この場を借りて、翻刻し、兼右本・国歌大観本との校異を掲げることにした。

〔底本〕天理本(右参照)

〔网合本〕宫内庁書陵部蔵吉田兼右筆二十一代集本△510・13V

旧国歌大観本

(兼流)

〔真名序〕

新統古今和詞集序

天成地定人靈之文斯明古往今来衆

製之体屢改若夫長歌短哥之異曲五字

七字之同工旋頭之有余混本之不足雖以似

分於步驟皆莫^一不^二發諸性情然而声成文

於五音工寄旺於四序彼句数之有合^一実物

理之自然是以出雲表之於前難波繼之於

後美君德則有富緒河之什^三平王怒則有

浅香山之篇或歌北藤於殿築之中或頌^一」^一オ

南橋於氏姓之始蓋三十一字之作四所以專盛而永伝也

平城天子詔侍臣撰万葉以來集更二十祀

逾六百雲箋霞輶則卷庄汗牛之書綿

句繪章則光奪抵鵠之玉譬猶孫陽執

策而群空冀北郢匠提斤而材尽山中雖

然言泉流於筆端酌而不竭思風發於胸

次仰則弥高贍馥遺芳方知霑被後世

青藍寒水豈不潤色前修古曰人歷既五一ウ

沒和歌不在於茲乎信哉斯言今国家

膺中興之運同上古之風時有所尚焉群六

莫不趨者無貴無賤要免牆面之譏一唱一和

思繼廣載之美征夷大將軍源丞相稟左

文右武之資懋南征北伐之績不啻服肱于

元首父母於黎民又能回筆海之例瀾萃

芸苑之墜緒爰奏于七朝言夫撰集者文思

之標識而今不作者已久矣寧非明時之欠

典乎由是遂挾禁內便宜之殿為和哥編二才

撰之所延喜命四臣於芸閣天曆置五人於

説

梨壺又元久於鳥羽離宮文永於龜山仙洞
八日若合符契
皆是叶嘉躅

不資準的耶仍詔權中納言
藤原朝臣雅世專掌其事論思獻納夙夜在

公出入古今取捨美惡縱雖非青天之窺管

果得無滄海之遺珠凡歷六年甫就一集春

夏秋冬之變風雲草木之興可以怨可以群

可以美可以刺藻麗者肅散者嚴密者紆

余者推而広之不可詳悉上摛三代之余風下二ウ

胎十胎千載之偉觀故名曰新統古今和詞集

者也永享戊午八月下澣謹序三オ三ウ

〔校異〕 (一)不——不(兼流) (二)合——合(兼) (三)和和平——和(兼流) (四)作——作(兼流) (五)磨——丸(流) (六)尚——而(流) (七)夫——

夫(兼流) (八)皆是叶嘉躅已若合符契——已若合符契(兼流) (九)朝臣——×(兼) (十)胎胎——胎(兼流)

〔仮名序〕

あめなりつちさたまりて人のことわざ

はしめておこりにしへゆきいまきた

りて国のおそひたえさる中にやまと

哥は八雲いつものそのかみ三そ文字ひと

もしをむすひそめしよりこのかた世をほ

め民をなて色にふけり心をのふるなかたち

としてこのさかひにむまれとむまれわか国に

来りときたれる人たかきも賤もさかしきも

をろかなるもひろくまなひあまねくもてあそ⁴オ

はすといふ事なしかゝりければならの葉の名に

二ほふ御門の万葉集をはしめとして永徳の

かしこかりし御世にいたるまておほやけことに

なすらへてゑらひあつめらるゑと甘あまり

ひとたひになんなれりけるこのほかうらくに

かきをくもしほ草は千箱のかすよりも

おほく家くにつもれることの葉は五の車に

のすともたうまししかはあれと心のいつみ

くめはいよくわきこと葉の林されはますく⁴ウ

しけし花よりも紅に藍よりも青き物は

この哥のみちになむありけるこくに神の

さつけし国をまもり世をうけたもつ位に

そなはりてあめかしたあまねきおほんうつ

くしみは野なる草木の陰よりもしけく

雲のうへあきらけきまつりことは空ゆく

月日の光もひとつにてもろこしの三の

すへらき五の御門のみちをおこしぬれはわか

八嶋四の海の外までもなひきよろこはすと」^五オ

いふ事なししかのみならず左のおほいまうち君

源朝臣ゑひすをたいらくるいくさの君のつかさを

かねてあつさ弓やなきのいとなみしけきはか

りことを幌のうちにめくらしあたを

千里の外にしりそくるみちまですへお^を

こなはれしかは立田山のしら浪こゑしつかにして

夜半の関の戸さす事をわすれ春日野の

飛火影たえて雪まのわかたつむにさまたけ

なしかるかゆへに四方の海山はこれ我家なり」^五ウ

しきしまの道ひろき時をしらしめんとおもひ

千々の春秋はこれわか世なりあしはらのことの葉

なかくつたはらんことをねかふこれによりて延喜に

芸閣の風かうはしく天曆に梨壺のかけ

さかへしむかしをしたふのみならず元久に鳥羽

のあとかさなり文永に龜山のよはひひさしき

ためしをおほしめして権中納言藤原朝臣雅世

に仰て和哥の浦の浪のよるへには大内山の

松の陰をしめつゝ富緒川のすみにこれるを」^六オ

わかちみしま江のあしよしをえらひとゝのへし

むおほよそ一人に勅する事いその上ふるき

あとをたつぬるにみな時にのそみてそのうつは

ものをえらふといへとも代ゝにつたへてその家を

さたむる事なしいはゆる後拾遺金葉詞華

千載これなりしかるに前中納言定家卿はしめて

たらちねのあとをつきて新勅撰をしるし

たてまつり前大納言為家卿又三代につたへて

続後撰をえらひつかうまつりしよりこのかた」^六ウ

あしかきのまちかき世にいたるまで^四ふち河のひとつ^五のなかれにあひうけて

やまとみことのさかひにはかたをならふるともから^六

なき也出雲八重墻のうちにはひとりあゆむ思ひ^七

をなせりそれはをのつから^八家の風とゑたえずふきつた

へて^九こと葉の花にほひのこれりしかはこれを

をきて外にもとめさりけらしそもく参議

雅経卿は新古今五人のゑらひにくはゝれるうへ

このみちにたつきひてもすてに七代にすぎその
 心をさとれる事も又一すちならざるにより「アオ
 ことさらに御ことこのりするむねはまことに時いたり
 ことほりかなへる事なるへしおほよそかくて」六とせの
 春秋をおくりむかへて九重九かさねの朝夕にいて入つゝ
 なきさによするしら玉はひろひのこせるうら
 みもなく浪にあらふにしきはたちあませる
 そしりあらしと心のをよふところ遠くもとめ
 ひろくあつむといへともなには江の玉かしわもは
 にうつもれあふさか山のいはし水木かくれはく
 つるならひふるくもなきにあらされはいまも又「アウ
 しらざる所なれとをしてとりえらへる哥二千、
 あまりはたまき名つけて新続古今和歌集
 といへり花をたつね時鳥をまち紅葉をかさし
 雪をなかむるよりはしめて君の御代をいのり
 仏の御法をたうとみみやこのさかるに別をくひ
 おしみ磯のうきねに夢をしのひまために
 みえぬ人をこひ心こひにあまるおもひをいひまつ
 ゆふくれの風も身にしみわたりかへるあしたの

露さへ袖にとゝまらず（あるはあたなる世を）」8ウ

さとりと（ま）をきむかしをおもひ（すへてよろつ）

草木とりけた物によせてもその心さしをのへ

すといふことなししかのみならず伊勢（ま）石清

水のふかきめくみをたのみ賀（ま）茂春日山の

たかきちかひをあふくにいたるまてみな時に

したかひおりにふれたるなさけなるへし

時に永享十年八月廿三日になむし

おはりぬるこの集かくこのたひえらひをかれ（を）

ぬれは河竹（ま）の世（ま）くの露霜をかさねても」8ウ

その色かはらす浜千鳥の浪のたちる

にさはきてもそのあとひさしくとゝまれ

らはあさか山のおくに入たゝむ人はふかき

みちのしるへとよろこひ玉津嶋のちりに

ましはれる神はみかけるひかりをそへ

かぢめかも」8ウ

校異 (一)ふけり——ふけ(兼) (二)ほふ——おふ(流) (三)あしかきのま——あしかきのま(兼流) (四)ふち河の——ふち河の(兼流)

(田)の——×(兼流) (め)やまと……の(つ)から——×(兼流) (代)こゑたえすふきつたへて——こゑたえす(兼流) (ハ)おほよそかく

て——おほよそ（兼流）^{かさね}（カ）重——かさね（兼流）（カ）みえぬ——みえぬ（兼流）（カ）心に……と、まらず——×（兼流）（カ）とを
 き……おもひ）——×（兼流）（カ）伊勢——×（兼流）（カ）賀茂——×（兼流）（カ）世——代（兼流）

8 前撰政家歌合出詠歌

本歌合の成立過程については、『室町前期』に詳しいので、省略に従ふ。

『国書総目録』は、以下の伝本を掲げる。

- ①国会図書館蔵本ハわ911・18・6V
 - ②宮内庁書陵部蔵『歌合三種』ハ501・74V所収本
 - ③京都大学附属図書館蔵本
 - ④宮城県立図書館伊達文庫蔵本
 - ⑤熊本大学附属図書館寄託永青文庫蔵本ハ107・36・5、7V
 - ⑥島原公民館松平文庫蔵本ハ139・4V
 - ⑦水府明德会彰考館蔵本
 - ⑧統群書類従所収本
- この他にも、
- ⑨河野信一記念文化館蔵本ハ356・967V
 - ⑩同『歌合集』ハ123・956V所収本
 - ⑪ノートルダム清心女子大学附属図書館黒川文庫蔵『歌合類聚』ハG69V所収本

⑩宮内庁書陵部蔵伝貞成親王筆断簡△509・83▽

等がある。筆者は、必ずしもすべての伝本の本文を精査してゐる訳ではないが、流布本たる⑧と、大異ないやうである。そこで、⑧を底本とし、室町末期写の⑨、△歌合集▽系統の⑩を以つて校合した。ただし、⑩は、四三番初夏左雅永歌の下句から判詞二十行分の断簡であるものの、貞成親王筆と思はれ、注目すべき本文といへる。『看聞御記』によると、貞成親王は、しばしば禁裏本を書写してゐるので、そのかたはれかもしれない。

次に、出詠者を掲げる。但し、未詳の人物もままあるので、⑧の作者付をそのまま引用する。

〔左方〕女房勲兼良兼良・左近衛中将教房卿・入道正一位為盛卿・右衛門督雅永卿・中納言局・沙弥常秀細川阿波守入道

侍従藤原為季朝臣・入空三福等淨土奈・前和泉守藤原経清・散位源持房大徳治・散位和氣茂成朝臣・大蔵卿祝部成前宿禰・

施薬院使丹波盛長朝臣・左大史小槻時繁

〔右方〕権大納言資広卿・近衛局・大僧都良清證真如院・左近中将藤原持和朝臣・法印堯孝・小宰相・正徹・散位源持

純山前右馬頭・権少僧都宗我西光院・従三位仲方卿・権大僧都実政・前下総守平氏数・前伊与守藤原定衡・左近府生兼任

本歌合の正徹の歌風について、初めて指摘されたのは島津忠夫氏（『冷泉歌風のゆくへ』△『国語国文』昭28・6▽）であり、また小垣貞夫氏（『正徹の妖艶美についての覚書』『前撰政家歌合』から）△『古典遺産』第29号△昭53・10▽も論じられた。室町和歌史研究のうへで、重要な資料の一といへよう。

9 文安五年六月十八日五十首外様御歌始

文安期の歌壇の状況については、井上氏が紹介された『室町前期』143頁『親長卿記』の記事が、やはり第一の資料とならう。

旧院御代、内外之人々相交、初百首御月次、後室町殿加人数給時、被分内外、各五十首御月次也、十八日廿五日也（『同記』文明十三年正月七日条）

事実、この歌会から、内々（Ⅱ帝の側近）と外様（Ⅱその他の廷臣）とに分かれ、外様は十八日、内々は二十二日（宝徳以後二十五日）に月次歌会が催された。それぞれの人数は、多少の出入りはあるが、次の如くである。

〔内々〕 正親町持季・同公澄・鹿田長賢・同雅行・万里小路冬房・山科顯言・甘藪寺親長・四辻季春・小倉実右・濫野井教国・広橋綱光・五辻政仲、他

〔外様〕 貞常親王・承道法親王・義運・滿意・堯孝・一条兼良・同教房・二条持通・足利義成（↓義政）・松木宗継・正親町三条実量・三条西公保・三条実雅・日野勝光・鳥丸資任・三条公綱・飛鳥井祐雅（↑雅世）・同浄空（↑雅永）・同雅親・上冷泉為富・下冷泉持為（↑持和）、他

一見明らかになやうに、「外様」に所謂歌道家の人々が集中してゐるのは、注意を要しよう。

この歌会には、右に掲げた外様歌人の内、大半が出詠してゐる。なほ底本（宮内庁書陵部蔵『公宴統歌』第二冊）の末尾に、

文安五年六月十八日 五十首

外様御哥始

新衆

室町殿 関白 二条右大臣

一条殿大納言 聖護院 実相院

三宝院（傍線引用者）

とあるので、兼良が初参であつたことが分る。

10 文安六年七月二十二日禁裏月次歌会

これも「外様歌会」の一。兼良の他に、貞常親王・持通・実雅・祐雅・実量・後崇光院・義成・承道・教房・公保・満意・持為・義運・為富・勝光・雅永・宗継・資任・公綱・伊勢貞国・勸修寺教秀・雅成らである。

11 宝徳元年十一月十八日禁裏月次歌会

以下、宝徳から享徳期にかけての禁裏月次歌会の人数は、ほぼ固定してゐるので、一一記すことを省略し、本項に一括して掲げて置く。兼良以外は、

祐雅・義成・教房・承道・満意・持道・義運・公保・浄空・実量・宗継・持為・実雅・雅親・資任・公綱・為富・堯孝・勝光

底本とした大東急記念文庫蔵『宝徳和歌集』は、井上氏が『室町前期』の中で「当時の写本らしいが、内容は錯雑し」（143頁）と述べられたのが、恐らく最初であらう。その後、稲田利徳氏が言及された（『国文学臨時増刊号編年体日本古典文学史』ハ昭52・2V140頁）程度で、その和歌史における意義は、たちいつて検討されてゐない。書誌のみ報告する。

帙入。袋綴装一冊。26×20・3cm。題簽に「宝徳和歌集 吉本」とある。墨付71丁。室町中末期写。

内容は宝徳期の歌会詠草集成であるが、かくの如き冊子本が一部として伝存してゐることは、注目に値しよう。

12・13・14・15・16・17・18・19・20・21・22 → 11

23 百番歌合出詠歌

本歌合の伝本は、次の如くである。

①宮内庁書類部蔵『十首歌合』本

②同『歌合部類三種』第十六冊本△501・74▽

③同伝日野内光筆本△日・4▽

④東京大学国文学研究室蔵『歌合類纂』所収本

⑤群書類従所収本

この内、書写時期・伝来等から見て最も注目すべきは③であらう。書誌は、卷子本一軸。天地27・3cm。表紙は金欄、茶地に桐。外題・内題ともになし。料紙は鳥の子。

奥書は、

此一冊雅永卿法名淨空
于時作者以自筆

高本校合之令添削早尤可為

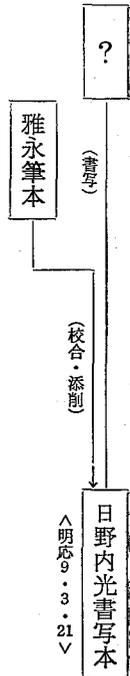
證本

明応九年三月廿一日

とある。明応九年に飛鳥井雅永筆本を以つて校合した由は分るが、書写時期も明応九年かどうかは分らない。事実この奥書に続いて、「聖護院滿意僧正」とある小紙片を押すが、滿意は明応九年以前に没してゐるので、



といふ系譜にならう。また、書陵部の目録・カードでは、筆者に日野内光を擬すが、さうすると、



と考へられる。しかし、内光は時に十二歳、筆者に擬するにはややためらひが残る。

このやうに、書写年時・筆者等に問題があるものの、室町中期から末期にかけての古写本であることは疑ひなく、満意にしても雅永にしても、出詠歌人の一人であるから、△証本▽と称しうるだらう。

次に出詠歌人を見ると、

〔左方〕貞常親王・満意・義運・持通・権大納言(松木宗継?義成?)・実相・祐雅(判者も兼ね)・資任・雅親・雅康

〔右方〕兼良・公保・実量・雅永・持為・勝光・為富・増運・義観・堯孝
らであつた。

なほ、本歌合の△場▽について、『国朝書目』は將軍家とし、『史料綜覧』は禁裏とするが、未だ確定を出来ずにする。

24・25・26・27・28・29・30 → 11

31 雅世哀傷歌

兼良の前半生に於る最大の(そして結局は唯一の)となつた宿敵祐雅(飛鳥井雅世)は、宝徳四年二月一日薨じ、大納言を追贈された『大乘院日記目録』『諸家伝』『飛鳥井雅望諸事蹟』。兼良が祐雅の息雅親に贈つた哀傷歌が、雅親の家集

『丑槐集』（『私家集大成雅親Ⅲ』）に見える。成立時は判然としないが、没後それ程遠くない時の作と考へる。兼良の長歌は、他に一例（46）あるだけで、比較的稀少である。

32 雅世一回忌品経歌

雅親は、父雅世の一周忌にあたり、品経歌を勧進した。その出詠歌人は、兼良以外、

義政・持通・公保・実量・教房・宗継・実雅・資任・淨空・公綱・持為・勝光・為富・教国・勝光・奴良・雅康・兵部少輔源成之・道覧（賢？）・常忻・正徹・堯孝・増運・義運・滿意・雅親・兵部少輔永秀

らであつた。公家・武家・法体歌人あまねく出詠してゐる点から見ても、雅世の歌壇における位置が想像されよう。

なほ、『釈教歌詠全集』第三巻に翻刻がある。

33 享徳二年六月十七日禁裏月次歌会

底本の書誌は、列帖装一帖。16・6×17・5 cm。『享徳二年十月二十五日仙洞歌合』と合綴。江戸初期写。

享徳期の内裏歌壇を構成する歌人を知る、恰好の資料である。人数は、

後花園天皇・貞常親王・兼良・持通・公保・実量・義政・実雅・資任・公綱・雅親・勝光・教秀・実右・為富・綱光・雅行・資世・教国・雅康

らである。

34 康正元年十二月二十七日内裏歌合

所在を確認できた伝本は、次の通り。

①国会図書館蔵本叢書料本14

②内閣文庫蔵A本 \wedge 201・250 \vee 『將軍家三十番歌合』『幕府褒貶詩歌合』と合綴。

③内閣文庫蔵B本 \wedge 201・246 \vee

④宮内庁書陵部蔵近衛信尹筆「歌合」本 \wedge 510・46 \vee 桂宮本。

⑤宮内庁書陵部蔵智仁親王筆「歌合」本 \wedge 510・38 \vee 桂宮本。『將軍家三十番歌合』と合綴。

⑥宮内庁書陵部蔵『歌合三種』所収本 \wedge 501・74 \vee

⑦学習院大学蔵三条西家旧蔵本

⑧熊本大学附属図書館寄託永青文庫蔵『歌合類聚』所収本 \wedge 107・36・5 \vee

⑨神宮文庫蔵本 \wedge 3・999 \vee 林崎文庫旧蔵。

⑩『歌合部類』所収本

⑪群書類従所収本

以上の伝本の本文を精査し了へたわけではないが、概していへば、これといった異本も存しないやうである。そこで、流布本である⑪を底本とし、④⑤⑥⑧を以つて校合した。

ところで、本歌合の成立時期だが、類従本は「十二月十七日」とする『史料綜覧』もが、①～⑩までの伝本及び『国朝書目』『歌書類目録』『統史愚抄』などは、「二十七日」に作る。確定はし難いが、仮に後者に拠つた。

作者と勝負付を掲げて置く。

〔左〕

女房（後花園天皇）

勝3負1持1

式部卿貞常親王

勝2 持3

關白一条持通

負3持2

右大臣一条教房

勝2負3

入道前内大臣三条西公保

勝1負1持3

權大納言三条公綱

勝1負2持2

太宰權帥正親町三条実雅

勝1負3持1

左衛門督飛鳥井雅親(判者)

負5

左近權中将飛鳥井雅康

負4持1

前大僧正滿意

勝3 持2

〔右〕

准后一条兼良

勝2負1持2

前内大臣三条実量

勝3負1持1

右大将足利義政

勝4 持1

前大納言烏丸資任

負3持2

權大納言中山親通

負3持2

權大納言日野勝光

勝2負2持1

浄空(飛鳥井雅縁)

勝2 持3

右兵衛督冷泉為富

勝1負2持2

前大僧正義運

勝2負1持2

權少僧都忠雅

勝3負2

35 康正元年十二月二十九日日野政光十三回忌品経歌

底本とした書陵部本『品経和歌』の奥書に、「康正元年十二月廿九日弁入道政光十三回忌新大納言勝光卿勳進之取集之月廿九日」とあるので、ある程度経緯が分る。

36 長祿二年八月十九日幕府歌会

底本とした尊経閣文庫蔵『將軍家歌会和歌』ハ145・古Vの他、宮内庁書陵部蔵『御会和歌』ハ501・378Vにも収められてゐる。底本の書誌は、卷子本一軸。料紙は鳥の子。天地30・3cm。外題は存しない。表紙見返し左上隅に「飛鳥井殿栄雅(琴山)」と極札が貼られてゐる。

菅原長清の真名序があり、その後に各々の歌が置かれ、末尾に、「長祿二年八月十九日和歌御会ノ題者 左衛門督(雅親ノ誦師 日野前大納言(資任)ノ講師 長清朝臣ノ講頌(略)」とある。奥書は別筆で、「右一卷者先雅親卿之真蹟不容ノ疑異者也応人之需加一語于後云ノ貞享第三大簇上旬ノ羽林中郎將藤原雅豊」とある。雅親ノ栄雅真筆か否か、著者に判定する力はないが、室町中期写は疑ひない。仮に雅親真筆だとすると、原本とも考へられる重要な資料である。

義政は、享徳二年に改名して以来、文学・芸能に耽溺し、この歌会についても、井上氏が「准后兼良以下すべて(作者が)名流公家で、義政の伝統文化への耽溺ぶりを遺憾なく表わしている」(『室町前期』)と述べられた通りであらう。

その人数は、

兼良・持通・義政・実雅・資任・公綱・親通・勝光・雅親・公教・為富・教秀・公躬・雅康・益光・政為・雅

藤・長清

らであつた。

本歌会の記事は、『在盛卿記』『足利家官位記』『統史愚抄』『南方紀伝』にも見えるが、『統史愚抄』が詳細なのでそれを引く。

行幸于内大臣議職北小路第一。今夜即行幸還御敷。此日。彼亭和歌会始。初度云。内大臣。臣已後敷。松契_三退年_一。(左衛門督雅親出之。哥仙公卿准后兼良。関白持連。已下十四人。(略)人々書_三応教之字於懷紙_二云。

37 長祿二年秋道興詠百首和歌卷未贈答歌

底本とした『統撰吟集』に関しては、『群書一覽』『大日本歌書綜覧』に触れられてゐる他、

(1)井上宗雄氏「統撰吟集」『和歌文学大辞典』△明治書院∥昭37・11∨)

(2)伊藤敬氏「三条西実隆と和歌——2——雪玉集のこと」『国語国文研究』30∥昭40・3)

(3)国立国会図書館参考書誌部編(『国立国会図書館蔵貴重書解題第九卷古写本の部第二』△昭53・8∨)

などに詳しい。伝本は『私撰集(伝本書目)』に詳しいが、(2)の所説によつて、尊経閣本を底本とした。袋綴装八冊。

24・1×20・5 cm。奥書が「此統撰吟集追而可清書而已／天文九曆二月日／(花押)」(第一冊)などである。筆者は徳

大寺実通とするが、確認出来なかつた。しかし、紙背文書に実通と署名がある書状案が、いくつか散見できるので、

さう考へても大きな間違ひはあるまい。

この歌は、道興の百首に兼良が合点、それに道興が短冊を贈り、兼良が返したものである。奥に「此百首長祿二年秋之比／一条准后合点／于時長祿三年拾月十八日／写之」とあるので、成立時期が分る。なほ、この百首のみの伝本がある。

大阪天満宮蔵「詠百首和歌」本ハ68・54V 江戸中期写。本文異同はほとんどない。

38 寛正三年七月十八日禁裏月次歌会

本歌会の詠草は、底本にした書陵部蔵『類聚和歌』の他、『公宴統歌』第六冊、『先代御便覧』、高松宮蔵『百首和歌』などに収められてゐる。人数は兼良以外次の通り。

義政・貞常親王・持通・後土御門天皇・教房・法源・実量・資任・雅親・滿意・常禧・勝光・公保・為富・増運・雅康・公躬・政為・雅藤・堯憲・公綱

39 寛正五年十二月五日仙洞三席詩歌

本詩歌会は、『蔭涼軒日録』『長祿寛正記』『続本朝通鑑』『続史愚抄』などに記事が見え、続群書類従に『寛正五年仙洞三席御会詩歌』として、序・詠草などが所収されてゐる。しかし、完本は、従来統類従本のみしか知られず、本文に疑はしい点がなくもなかつた。しかるに、もう一本完本が出現し、抄出本も二本あらはれるに至つた。

伝本を紹介する前に、本詩歌会の構成を略記して置かう。引用は底本（後述）による。

仙洞三席御会詩歌寛正五十五（内題）

A 七言冬日侍 仙洞同賦八絃帰 聖猷応

太上皇 製詩一首以明為韻
并序

從二位行權中納言臣菅原朝臣継長上

a 冬日同賦八絃帰聖猷応

製以明為
韻

從一位藤原朝臣 兼良上

重華宮裏燕群英 廣載時聞賦鹿鳴 無限恩波八黃外

漁歌樵唱又文明

※以下詩人は、近衛房嗣・二条持通・足利義政・久我通尚・東坊城益長・西園寺実遠・日野勝光・柳原資綱・

万里小路冬房・洞院公數・葉室教忠・勸修寺教秀・唐橋在治・烏丸益長・中御門宣胤・東坊城頭長・菅原長

清・菅原為親。統類従本は、日野勝光がなく甘露寺親長が入る。

B 冬日侍大上皇仙洞同詠松為

久友応 製和歌一首并序

征夷大將軍從一位行左大臣々源朝臣義一上

b 冬日同詠松為久友応

製和哥

從一位臣藤原朝臣 兼良上

※以下歌人は、房嗣・持通・烏丸資任・今出川教季・三条公綱・勝光・三条公教・大炊御門信量・飛鳥井雅

親・冷泉為富・小倉実右・広橋綱光・正親町三条実躬（統類従本「公躬」）・飛鳥井雅康・冷泉政為・飛鳥井雅

藤・町広光・藤原尚光・八条為保。

C ぬししらずの物語 ※雅親作（?）。

次に、伝本を簡単に紹介することにする。

①宮内庁書陵部蔵『御会部類記』Λ210・741V 袋綴装一冊。江戸初中期写。『建保六年中殿和歌管絃御会』

『建治四年亀山殿詩管絃会（記録のみ）』『正和四年仙洞三席御会始（同上）』『正和四年詩歌御会』『正応二年鳥羽

殿御会』『至徳元年後円融院仙洞三席御会（記録のみ）』『元亨四年内裏歌会』『応永十九年仙洞三席御会』『応永十九年宮中歌会』などと合綴される。巻末に、「本云借右大弁宰相守^光卿本卒尔馳筆訖今可令清書莫令外見矣／＼」とあるが、この本奥書が、本書全体にかかるのか、巻尾の『寛正五年仙洞三席御会』のみにかかるのかは、不明である。また、『国書総目録』等は、冬良撰とするが、いかがか。〔内容〕
A a B b C

②大倉山精神文化研究所蔵『公宴詩歌并序』ハイイ・5V 『古文書古記録影写副本解題』（昭18・1）による。①と同じ奥書あり。

③統群書類従本〔内容〕A a B b C

④尊経閣文庫蔵『仙洞三席御会詩歌一首并序』ハ13・2・大V 宝永元年写。〔内容〕A B

⑤内閣文庫蔵『寛正三席御会』ハ201・123V 列帖装一帖。江戸初期写。奥書が、「件一帖申出親王家御／＼本早卒令書写了／誤文字重而可遂校／合也／明応第七孟春廿二日／沙弥蓮空」とある。〔内容〕C

40 文明二年正月六日北畠家連歌合跋

本連歌合については、福井久蔵氏『一条兼良』（厚生閣Ⅱ昭18・4）の解説が、簡にして要を得てるので、それを引き。

伊勢北畠大納言家での頃催された二百五十番連歌合に、文明三年正月判を下し、跋文を加へた下半が近年発見され、（略）その人々は権大納言教具、桑門光暁、参議具茂、右中将政郷、侍従頭豊、僧の宗祇・宗怡、三枝幸高、平章棟、平重孝、藤原季理、伝阿法師、賀阿法師（引用者云、他に平千盛）十五人（正しくは十四人）で、公の跋文は都の兵火をのがれて佗住居の状を記したところより筆を立て、最後に一首の歌が添へてある。（前掲書81

頁

福井氏は御巫清直氏蔵の兼良自筆本を紹介されてゐるが、現在は書陵部に蔵される。本書は、書陵部本八502・4
19Vを底本とした。

なほ、この跋文のみは、神宮文庫蔵『藤河の記』一本八・856、室町末写V巻末にも付載されてゐる。

41・42 文明三年閏八月十五日夜詠歌・後花園院一回忌哀傷歌

『大乘院寺社雜事記』は、補続史料大成本を用ゐた。

43 藤河の記

『藤河の記』の伝本は、次の分類基準によつて十系統に分れる。

A 249 (分行はじ) +あかさかをこゆとて の有無

アリ：○ ナシ：×

B 九日の記事

C 十五日の記事

D 263 (「まれにきて」) + 国人説曰この山には天人影向あるによつて人來の松とも名つけ侍るとかや

263 ノミアリ：△

E 264 (「いのるそよ」)

F 284 (「みたれ行」)

G よくせすは笠置にとまるへかりけり (五月二十八日条)

補入…ホ

G F E D C B A	
○ ○ ○ △ ○ ○ ○	第一類
× ○ ○ △ ○ ○ ○	二
× ○ ○ ○ ○ ○ ○ (ホ) (×)	三
× ○ ○ × ○ ○ ○	四
○ × × ○ ○ ○ ○	五
× ○ × ○ ○ ○ ○	六
○ × ○ ○ ○ ○ ×	七
○ × × ○ ○ × ×	八
○ × × ○ × ○ ×	九
○ × × ○ × × ×	十

〔第一類〕

① 静嘉堂文庫蔵本 八 2・6 3 V 阿波国文庫旧蔵。江戸中期写。底本に用ゐた。

② 群書類従所収本

③ 国会図書館蔵『鶯宿雜記』 八 2 3 8・2 8 9 V 卷二三二所収本 ②の転写本。

④ 祐徳稻荷神社寄託中川文庫蔵『桑孤』 八 6・1 2・7 8 4・別6 V 所収本 国文学研究資料館蔵紙焼本による。

⑤ 宫内庁書陵部蔵伏見宮本 八 伏・5 7 V 『艶詞』等と合綴。江戸中期写。

⑥ 慶応義塾大学附属図書館蔵本 八 1 2 4・3 7 V 江戸中期写。

⑦ 扶桑拾葉集所収本 (板本)

⑧ 東北大学附属図書館狩野文庫蔵本 八 狩・第4門・1 1 3 1 5 V 写真版による。

〔第二類〕

⑨ 篠山鳳明高校青山文庫蔵本 八 9 1 4・9 V 国文学研究資料館蔵紙焼本による。

〔第三類〕

- ⑩ 神宮文庫蔵A本 \wedge 8・856 \vee 室町末期写。
- ⑪ 天理図書館蔵本 \wedge 291・3・743 \vee 江戸中期写。北条霞亭旧蔵。
- ⑫ 岐阜県立図書館蔵本 \wedge 3・65・4 \vee 写真版による。
- ⑬ 東京大学史料編纂所蔵本 ⑫の影写本。
- ⑭ 神宮文庫蔵B本 \wedge 8・955 \vee 江戸中期写。
- ⑮ 天理図書館綿屋文庫蔵本 \wedge れ7・12 \vee 江戸中期写。
- ⑯ 中田祝夫氏蔵本 本文未調ではあるが、奥書からこの系統と思はれる。
- ⑰ 東京大学総合図書館蔵本 \wedge E26・478 \vee 江戸中期写。
- ⑱ 東京大学国文学研究室本居文庫蔵本 \wedge 本居枝298・国文245 \vee 国文学研究資料館蔵紙焼本による。

〔第四類〕

- ⑲ 宮内庁書陵部蔵黒川本 \wedge 黒・125 \vee 弘化二年写。

〔第五類〕

- ⑳ 内閣文庫蔵本 \wedge 177・1104 \vee 『筆のすさび』と合綴。江戸初期写。
- ㉑ 島原公民館松平文庫蔵本 \wedge 116・42 \vee 江戸初期写。
- ㉒ 宮内庁書陵部蔵御所本 \wedge 501・787 \vee 江戸初中期写。
- ㉓ 神宮文庫蔵D本 \wedge 3・2089 \vee 『筆のすさび』と合綴。江戸中期写。

〔第六類〕

- ㉔ 神宮文庫蔵C本 \wedge 3・4326 \vee 『文安詩歌合』と合綴。江戸中期写。

〔第七類〕

②^{*}尊経閣文庫蔵本ハ9・41V 江戸初中期写。

②^{*}筑波大学附属図書館蔵本ハル・170・85V 宝永二年写。

〔第八類〕

②^{*}九州大学附属中央図書館蔵本ハ549・ミ・13V 江戸初期写。

〔第九類〕

②^{*}都立中央図書館加賀文庫蔵本ハ2497V 江戸初期写。

〔第十類〕

②^{*}東京都立大学附属図書館蔵本ハ911・4・I13iV 江戸末期写。

③^{*}寛文12年刊本 後刷本多し。絵入。荒川宗長板行。

③^{*}京都大学文学部陳列館古文書室蔵本ハ国文・特つ・3V 江戸末期写。

※*を附した伝本を、対校資料として用ゐた。

以上の系統は、兼良の種々の手入れによつて派生していったものと思はれるが、詳しい成立過程は、今のところ判然としない。ただ、⑩の奥書に、

于時文明五年無神月廿六日書写之訖

今年五月上旬之初美濃御下向之時名

所旧跡御歴覽之時之御作文

とあるので、第五類本が、実際の旅のおよそ半年後には、既に成立してゐたと考へられる。また、第五類本は、いろいろな面から見て△原型▽とは考へにくいから、△派生▽もこの時点で始つてゐた、といふことにならう。

なほ、兼良のこの度の美濃下向に關しては、白井忠功氏「兼良の『ふち河の記』——中世紀行文学研究——」(『立正大学国語国文』第7号Ⅱ昭45・3) ↓ 『中世の紀行文学』(文化書房博文社Ⅱ昭51・7) に詳しい。

また、拙稿「『藤河の記』の成立——兼良論序説——」(『国語と国文学』昭56・8) の中で、基本的な問題を整理しておいた。

44 南都百首

本書については、拙稿「『南都百首』の成立」(『言語と文芸』第87号Ⅱ昭54・3) で少しく考へた。その後考へ得たことを追加し、書誌を記すことにする。

成立時期は、序文・内題等から見て、文明五年六月二十五日の出家が上限、下限は、諸本に見える「右百首一条禪閣詠作也以自筆之本書写訖于時文明第五仲秋下旬候」といふ奥書から、同年八月下旬と考へられる。

次に伝本だが、二類に分けられる。分類基準は次の通り。

(1) 序文に於ける脱落

第一類…のりのしの門をは心さすといへともはな香のつとめに物うくしていたつらにあかしくらし (①による)

以下同様。傍線武井)

第二類…法の師の門をはこころさせともいたつらにあかしくらし (②による。以下同様)

(2) 内題の有無

第一類…詠百首和歌 桑門寛恵

第二類…ナン

(3) 「若菜」の歌の有無

第一類…アリ

第二類…ナシ

(4)「氷室」と「泉」の順序

第一類…氷室・泉

第二類…泉・氷室

(5)「藤(第二類は藤花)」の歌の注記の有無

第一類…閑院左大臣南円堂をたてゝ藤氏のさかへをいのりし事を思よせ侍

第二類…ナシ

(6)「七夕」の歌の注記の有無

第一類…竜門の布さらす山ひめの事をいへり

第二類…ナシ

〔第一類〕

①内閣文庫蔵「詠百首和歌」本 \wedge 201・453 \vee 江戸初期写。林羅山旧蔵。底本に用ゐた。

②河野信一記念文化館蔵「詠百首和歌」本 \wedge 123・922 \vee 江戸中期写。

③島原公民館松平文庫蔵『歌書集』 \wedge 119・6 \vee 所収「後成恩寺百首和歌」本 江戸初期写。

④内閣文庫蔵『墨海山筆』 \wedge 217・31 \vee 第九四冊所収「一條禪閣百首和歌」本 江戸末期写。

⑤天理図書館吉田文庫蔵「詠百首和歌」本 \wedge 81・吉119 \vee 江戸初期写。

⑥金刀比羅宮図書館蔵「詠百首和歌」本 \wedge 23・5・1277 \vee 国文学研究資料館蔵マイクロフィルムによる。

〔第二類〕

⑦内閣文庫蔵「後成恩寺殿南都百首」本△201・461▽ 江戸初中期写。

⑧群書類従所収本

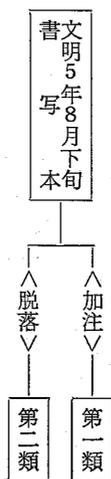
⑨宮城県立図書館伊達文庫蔵本△911・24・17▽ 江戸中期写。『藤代王子御会建仁元年』『長門住吉社宗祇法楽百首明暦四年』『住吉社法楽百首永享九年』と合綴。

⑩大阪市立大学附属図書館森文庫蔵本△911・FUJ・森文庫▽ 江戸中期写。

⑪刈谷図書館蔵『蓬芦雜鈔』△6203▽第一〇一冊所収本 江戸末期写。

⑫『大日本史料第八篇之二』所収本

これらの伝本は、次のやうな系譜が想定できよう。



以上の立論の詳細な過程は、前掲拙論を参照されたい。

45 文明七年十二月二十九日野政光三十三回品経歌

底本については3参照。この度の詠進歌人は次の通り。

義政・桑門大通（Ⅱ房嗣）・持通・政嗣・政基・通博・政家・西誉・栄雅・公敦・為富・教秀・綱光・資世・季春・教国・永継・雅康・広光・縁光・量光・威人頭左中弁兼顕・実隆・雅国・為光・勝光・覚恵（Ⅱ兼良）・尊応・増運

46 文明九年七月七日七夕歌合卷末長歌

所謂『七夕歌合』だが、成立事情については、井上宗雄氏『室町前期』に詳しいので、それを引用させていただき、若干の私注を付すことにする。

六月廿九日に作者に題(勅題)が下され、七月七日詠進、八・九日天皇の前で番えられ、⁽¹⁾滋野井教国が清書して、奈良の兼良に判を記すべく下命があり、折から宗祇が奈良に下るといふ便宜で、宗祇が持参し、⁽²⁾二十九日興福寺成就院に赴いて歌合を兼良に渡した。(略)兼良は早速判詞を記して八月中旬までには出来たらしいが、それを携えて上洛する使者(宗祇か。兼頭記九月十二日の条)が途中敵陣(西軍か)の足軽に襲われて奪われた為に九月になつて再び浄書進上されたらしい。(前掲書20頁)

(1)三条流。小松茂美氏『日本書流全史 下』(講談社リ昭47・8)に短冊が見える。

(2)「宗祇下向、室町殿・同御合・禁裏御歌合御点判詞御申之間、為御使参上成就院云々、大乱中希有事也、愍而京都儀八毎事無其道、御運如今者數入之由云々、公武上下昼夜大酒」(『大乘院寺社雜事記』文明九年七月二十九日条)

(3)書陵部本(後掲)奥書により、八月十日とわかる。

本書の伝本はいくつか存するが、同一系統で、これといった異本も善本もないやうである。

①内閣文庫蔵A本 \wedge 201・198 \vee 『親長卿家歌合』と合綴。江戸中期写。

②内閣文庫蔵B本 \wedge 201・200 \vee 奥書が「于時明応第四乙卯孟冬初七書写畢」とある。江戸中期写。

③宮内庁書陵部蔵本 \wedge 501・632 \vee 奥書が「本云文明九年七月晦日自 禁裏被 仰下之ノ八月十日比書判詞 令返上」とある。江戸初期写。

④島原公民館松平文庫蔵「文明七十番歌合」本 \wedge 139・7 \vee 江戸初期写。

⑤熊本大学附属図書館寄託永青文庫蔵本 未見。

⑥水府明德会彰考館蔵本ハ巳13V 『文龜三年歌合』と合綴。江戸中期写。

⑦水府明德会彰考館蔵『歌合部類』ハ巳12V所収本

⑧三康図書館蔵本ハ5・1636V

⑨『歌合部類』所収本

⑩群書類従所収本 底本に用ゐた。

この歌合で特に目につくのは、日野富子の六勝一持といふ好成绩であらう。兼良のおもねりと解せぬこともないが、富子の歌才により、注目した文章に、唐木順三氏「慈照院義政」『展望』昭40・12 ↓『忠仁四話』ハ筑摩書房ハ昭41・4Vがある。

47 文明十年二月三日北野社法楽百首

この百首は続歌である。『お湯殿の上の日記』『親長卿記』『実隆公記』などの記事を総合すると、正月二十三日に短冊が人数に配られ、翌二月三日奉納されたらしい。主な詠進歌人は次の通り。

後土御門天皇・邦高親王・安禪寺宮・義政・道永法親王・覚恵・曇花院宮・日野富子・持通・堯胤法親王・政嗣・為富・教秀・秀春・雅行・政長・親長・雅康・勾当内侍・政為・教国・為広・実隆・言国・宣親・元長

48 文明十一年正月七日三合厄祈禳和歌

校合に用ゐた『甲子夜話』は、中村幸彦・中野三敏氏校訂『甲子夜話四ハ東洋文庫333V』（平凡社ハ昭53・7）による。同書によると、松浦静山が手にしたのは、足水軒蔵の兼良の案文（屋代弘賢摹刻）らしい。

「三合」とは、「陰陽道でいう厄年の一つ。暦の上で一年に大歳・太陰・客気の三神が合すること。これを大凶とし、この年は天災、兵乱などが多いとする」(『日本国語大辞典』)。兼良は、真名消息と和歌を内裏に奉った。

49 文明十一年四月二十六日崇徳院法楽百首

底本とした高松宮本は、国文学研究資料館蔵紙焼本による。書陵部にも一本A501・878V蔵される。人数は、次の通り。公武僧あまねく詠進してゐる。

義尚・覚恵・義政・雅康・兼顯・為広・基綱・政元・政国・政重・貞宗・勝益・政行・桂厚・通秀・賢盛・玄就・元為・長恒・元景・元家・元保・元重・通家・元季・通隆・範光・成孝・元信・正光・元隆・氏俊・元親・長盛・賢明・賢兼・賢保・貞秀・貞光・経孝・元右・弥四郎・元種・保定・景行・景頼・長広・定阿

50 文明十一年六月九日御霊社法楽和歌

本法楽和歌のハ時Vに關しては、記録によつて若干のゆれが見られる。

『史料綜覧』『大日本史料』等は、『親長卿記』の六月九日条、

今日仰云、飛鳥井大納言入道在京之間、和歌有御張行、可有御法楽、御靈、御人数可書立云々、於御前予書之、各可相催之由有仰、伏見殿仁和寺宮等、以使者進御題了、其外以廻文触了

を根拠に「九日」とするが、『類聚和歌』『基綱卿詠』『垂槐集』などは「三日」に作る。中院通秀が詠進したのは十八日になつてからである(『十輪院内府記』)。

なほ、『大日本史料』は『親長卿記』を右記の如く引くが、元来aとbは、別々の事柄だらう。

人数は公家歌人ばかりだが、四人ほど女房歌人も出詠してゐるのが目につく。

後土御門天皇・勝仁親王・邦高親王・道永法親王・覚恵・信量・栄雅・通秀・為富・教秀・秀春・雅行・親長・高濑・宗綱・量光・教国・忠富・実隆・基綱・為広・宣親・季熙・俊量・元長・安禅寺宮・真乘寺宮・旧院上臈・勾当内侍

51 文明十二年八月十四日文明年中応製詩歌

書名は統類従本による。『文明身然集』(『和歌文学大辞典』山岸徳平氏執筆)も同本である。

八月十四日、僧景菴蘭坡に勅題を賜ひ、五山僧徒に先哲・名勝の詩を詠進せしめた(『実隆公記』)。今その詩題を掲げると、

天橋立・芳野・竜田河・比叡山・難波津・須磨浦・住吉浦・富士山・神泉苑・白河関・御裳濯河・長谷寺・武蔵野・広沢池・志賀都・春日社

醍醐帝・菅家・聖徳太子・小野宮大臣・行基・弘法大師・利仁将軍・金岡・俊綱朝臣・晴明・道風・成通・人丸・衣通姫

つづいて同二十四日、漢土の人物・名勝の勅題を公家に賜はつた。兼良は二十六日に題を知らされた(『実隆公記』)。歌人と題は次の通り。

後土御門天皇(孔子・潯陽江) 一条兼良(唐堯・羅浮山) 転法輪三条実量(善導大師・五湖) 大炊御門信量(褒姒・

渭浜) 飛鳥井雅親(李太白・昆明池) 中院通秀(達磨大師・華表) 勤修寺教秀(陶淵明・盧山瀑) 海住山高清(郭

照・函谷関) 甘露寺親長(伯牙・黄河) 飛鳥井雅康(張良・湘江) 三条西実隆(孫思邈・商山) 冷泉政為(列子・

巫陽台) 姉小路基綱(原憲・天津橋)

この後、詩題が十追加されたが、年時は未詳(統類従)。統類従本は、題のみで詩を闕くが、内閣本「文明詩歌」へ特

61・34V等は、本文を有する。

翌十三年三月二十四日、歌題が追加され、近衛政家・久我通博・西園寺実遠・冷泉為広・滋野井教国らが、作者に加はった『実隆公記』。政家は五月十五日に詠進してゐる（『後法興院記』）。

本書の伝本は比較的多く存してゐる。

〔文明易然集〕

① 東京大学総合図書館南葵文庫旧蔵本A E 31・664 V 享保17年速水房常写。

② 東京大学史料編纂所蔵本

③ 宮城県立図書館伊達文庫蔵本 『文明詩歌合』と合綴。

④ 伊達開拓記念館蔵本

〔文明年中忠製詩歌〕

⑤ 内閣文庫蔵『撰津徴』A 218・38 V 第一二九冊所収「文明年中忠製詩」本 漢詩のみの抄出。

⑥ 東京大学史料編纂所蔵「禅林忠製詩并和歌」本

⑦ 続群書類従所収本 底本に用ゐた。

〔文明名所人名詩歌〕

⑧ 内閣文庫蔵本A 201・145 V 江戸初期写。

〔文明御屏風詩歌（合）〕

⑨ 内閣文庫蔵本A 特61・34 V 江戸初期写。

⑩ 島原公民館松平文庫蔵A本A 150・37 V

⑪ 島原公民館松平文庫蔵B本A 150・38 V

⑫神宮文庫蔵本△3・21▽『春日社法樂五十首和漢』『文明詩歌合』と合綴。江戸初期写。

⑬高知県立図書館山内文庫蔵本△ヤ921・46・1▽

〔文明短冊〕

⑭元禄17年刊『文安詩歌合』下冊附載本 和歌のみ抄出。

〔詩歌〕

⑮宮内庁書陵部本△501・367▽ 江戸初期写。

〔その他〕

⑯宮内庁書陵部蔵『類聚和歌』△154・1▽所収本

筆者の知りえた伝本のみ掲げたが、博搜すればまだ相当数の伝本があらう。以上は一見しただけのものもあり、本文を精査し了へたといふわけではないので、注目すべき伝本とその性格について、簡単に述べて置く。

⑨⑩⑮は、追加された十首の漢詩を有する。これに対して、②は、追加された政家らの和歌を含まない。とする
と、前者は△最終形態▽、後者は△初源形態▽と考へられさうである。

兼良の和歌については、さしたる異文も存しないので、流布本たる⑦を底本に用ゐた。

52 文明十二年九月十九日細川道賢十三回忌品経歌

『品経和歌』、内閣文庫蔵『撰津徴』、国会図書館蔵『書記群類』に詠草が収められる。

細川政国の勳進で、九月十九日披講。例によつて、公武僧の歌人が広く詠進してゐる。

53・54・55

底本については、9の解説参照。

56 年時未詳・禁裏五十首御うた

底本については、37の解説参照。

出詠歌人は、御製・仙洞・室町殿・親王御方・兼良・持通・持為・雅親・義運・雅永・堯孝・実量ら。年時未詳ながら、歌人の顔ぶれや、この前後に収められてゐる歌会詠草が文安期のものであるところから考へて、文安と宝徳期の成立と思はれる。

57 年時未詳・『又片方』所収歌

本書については、ほとんど言及されることがなく、成立・編者で分ることはなほ少ない。伝本は、次の二本を知りえた。

①宮内庁書陵部蔵『歌仙類聚』△501・530▽所収本

②北海学園大学附属図書館北駕文庫蔵『武家百人一首』△文・536▽所収本 底本に用ゐた。

①は、『図書寮典籍解題 続文学篇』(養徳社Ⅱ昭25・3)に、次の如く解説されてゐる。

Q 又片方(続六歌仙)△後成恩寺入道前関白太政大臣兼良 権大僧都堯孝 権中納言雅康 前大納言為広 権中納

言基綱 宗祇法師▽(略)書名の「又片方」から推すと、左右六歌仙各一首づつ、十二人十二首を番はせたものか。

官位から見て、成立は十六世紀まで下るか。

58 年時未詳・『叢塵集』所収歌

本書は、曼殊院に蔵される良恕法親王（二五七四—一六四三）の聞書七冊の内の一である。越智美登子氏「良恕聞書の世界」（『国語国文』昭53・1）で初めて紹介され、同氏の解説で、『叢塵集曼殊院蔵（京都大学国語国文叢書十一V）』（臨川書店∥昭53・12）として影印・翻刻された。小著では、後者の影印によつた。書誌は、同氏の解説によらぬ。なほ、前者の紹介によると、聞書の一である『聴記集』（前掲叢書の一として公刊予定の由）にも、兼良の歌が一首収められてゐるらしいが、閲覧の機会を得ない。

59 年時未詳・『八景和歌』所収歌

稲田利徳氏『正徹の研究』（笠間書院∥昭53・3）979～986頁に、この兼良詠を含む「瀟湘八景歌」が翻刻・考証されてゐる。作者は、兼良・雅親・正徹・賢良・持為・道賢・堯孝・正広。この「瀟湘八景歌」を収めるものに、底本の福井県立図書館松平文庫蔵『集書』AM911・25Vの他に、宮内庁書陵部蔵『待霽抄』A266・4V、同『歌書集成』A155・109V、国会図書館蔵『八景類従』Aわ919・8Vなどがある（稲田氏前掲書による）。

60 A 懐紙

橋本不美男氏の解説を引くことにする。

この「二首懐紙」は菱形の縹色楮紙、縦二四・二糎横四七・一糎。従一位と位署のみあるので、文明二年七月十九日辞闕白以後、文明五年六月二十五日出家の間の詠であろう。

60 B 懷紙

永島氏の解説によると、大阪市生形貴一氏蔵。和歌三神勸請三幅対の一、柿本・玉津嶋神の二幅は現存か否か不明の由。

61 A 短冊

この短冊は、井上通泰の蔵書志である『南天荘墨宝』（春陽堂Ⅱ昭5・2）にも、写真版とともに紹介されてゐる。その解説を引く。

縦一尺九分、横一尺六分の白短冊である。ハツ尾花の花字を両行の中央に書いて落款に代へてある。花は一条禪閣兼良の連歌名である。（略）此人の短冊は少くとも坊間には極めて乏しい。甲子夜話（？）に後西院天皇の御時短冊帖を作らしめたまひしに兼良の子関白冬良の短冊だけ御手に入らなかつたのを古筆某が浪華人の所有せるを乞受けて奉つたといふ事が出て居るが今日では兼良の短冊の方が寧冬良のより獲がたくはあるまいか。たとへば余は近年冬良の短冊は二葉まで見たが兼良のは此短冊の外には見なかつた。又昨年中日本古典全集刊行会で弊蔵の兼良筆伊勢物語を複製するので其口絵とすべく諸家に就いて兼良の短冊（兼良と款せるもの）を蔵せらるゝかと聞かされたが唯一葉偽物が出て来ただけであつた。

兼良の連歌名が「花」か否かは、判断する材料を持たない（『読史備要』の「名字索引〇一字名」には、確かに「花一条兼良」と見える）が、「桃」は用ゐたやうである（『大乘院寺社雜事記』文明八年五月十六日条）。

61 B 短冊

『大日本史料八の十三』によると、山城妙心寺塔頭桂春院所蔵の由。

61 C 短冊

『和歌文学大辞典』（兼良の項）にも掲出されてゐるが、橋本不美男氏蔵写真版と照合した。この和歌は、13 宝徳二年正月十八日禁裏月次歌会の折の詠（↑139）である。

61 D 短冊

『短冊手鑑』日本古典文学影印叢刊16V（貴重本刊行会Ⅱ昭53・1）による。

61 E 短冊

現蔵者不明。解説を引いて置く。

雲紙くもがみに書かれたこの短冊には「兼良」の署名があるので、文明五年（一四七三）V、七十二歳で出家する以前に書かれたものと推定される。とはいふものの、その線質には老年期の特徴があらわである。彼の書は、江戸時代に編まれた書流系譜では、勅筆流（後田融院を祖とする）に分類される。文字の構えにスケールの大きさは感じられないが、ねばり気のある線で一字一字気を抜かずに書き進めるところに、彼の学者としての一面を見る思いがする。（209頁）

61 F 短冊

現藏者不明。「兼良」と署名するので出家以前の詠である。

61 G 短冊

いまだ底本以外の伝本の所在を聞かない。下限は、後花園院の崩御した文明二年。

存疑 I

福井氏の解説を引いて置く。

畏友高野辰之博士は公の真筆と伝ふる冬十五首の横物の大幅を蔵してゐられる。初冬から時雨・落葉・霜・寒蘆・冬月・氷・千鳥・水鳥・網代・嶺雪・庭雪・鷹狩・炭竈・炉・歳暮に至るもので、百首詠の断篇と思はれる。初冬の歌は(略)歳暮の歌は(略)のやうである。

存否は分らない。

ところで、この断簡は、福井氏の述べられる如く、百首歌の一部であらうと思はれる。兼良の現存する百首歌は、『永享百首』『南都百首』の二のみであるが、散佚した(?)ものとして、なほ二を加へうる。

A 故禅閣功題百首等撰出之、付帑(新カ)『十輪院内府記』文明十五年七月二十六日条

B 資直来、尺阿九十賀日記、□成恩寺詠草等持来之、彼詠草寛正撰哥百首在之、仍可写留之間借請者也(実隆公記) 永正八年六月十六日条

Bは所謂△文正百首▽であると思はれる。△文正百首▽の人数は、従来、雅親(『亜槐集』一)・房嗣(『後法興院記』

尊応『先代御便覧』二十八・基綱『卑懐集』・後花園院『御集』・後土御門院『紅塵灰集』・貞常親王（尊経閣文庫蔵『仙洞御百首』、彰考館蔵『貞常親王百首』）・旧院上藤局（『再昌草』三）らが知られてゐるが、これに兼良を加へることが出来る。

ところで、伝兼良筆の大幅は、あるいはB、即ち人文正百首Vの零本かもしれない。今、『丑槐集』によつて冬の歌題を示すと、次のやうになる。

初冬・時雨・落葉・霜・寒蘆・冬月・氷・千鳥・水鳥・綱代・嶺雪・庭雪・鷹狩・炭竈煙・歳暮

相違は、(1)炉の有無(2)炭竈↑炭竈煙の二点である。(2)はいづれかの誤写とも考へられようが、(1)は少々厄介である。歌題が後にしぼられたのかもしれないが、わからない。それにしても、このやうに歌題がほとんど一致するのは、注目してよからう。

なほ、

七日、午后清三位（≡清原業忠）来尋、因曰、前日見还梅花百詠之和一卷、此卷乃一条相公作也（『臥雲日件抜尤』寛正四年五月四日条）

の「梅花百詠」を、大日本古記録は、一条相公≡兼良作とするが、いかが。寛正四年時の兼良と教房の官位は、次のやうになつてゐる。

前大臣 兼良_{六十一} 前関白。准三宮。

前左大臣 従一位 教房_{四十} 前関白（四月止之）。

兼良ならば、△准后Vとでもありたいところである。そこで、一応教房と考へて置く。

存疑II

従来、『応仁記』『応仁別記』（いずれも類従本の書名）の二書は、無批判に引用されて来たが、松林靖明氏（『応仁記試稿——類従本の成立と性格を中心に——』△『古典遺産』第20号∥昭44・12∨）「応仁の乱と軍記——応仁別記の場合——」△『軍記と語り物』第11号∥昭49・10∨）、和田英道氏（『応仁の乱関係軍記書誌目録稿』△『跡見学園女子大学国文学科報』第5号∥昭52・3∨）『応仁記・応仁別記（『古典文庫381』）△昭53・6∨）らの研究によつて、その成立過程がかなり判明してきた。今、和田氏の術語によつて示す。

一 卷本『応仁記』——△『野馬台詩』削除？∨——二 卷本『応仁記』——三 卷本『応仁記』
 『応仁別記』

本文篇に掲げた文章は、『応仁別記』にのみ本来は収められてゐたものである。底本としては、古典文庫本に翻刻されてゐる、内閣文庫蔵本△167・120∨を用ゐた。

参考I

この手鑑は、『大東急記念文庫書目 第二』に掲げられたものである。未見、写真版による。筆跡は、どうも兼良のものではないやうだ。

〔追補〕

脱稿後、兼良自筆「十首和歌」が静嘉堂文庫に所蔵されてゐることを知りえた。同文庫発行『日本の書跡』（昭57・4）に写真版・釈文・解説が掲載されてゐる。先解説を抄すると、

76 一条兼良十首和歌 一幅 室町時代

縦九三・三cm 横三八・六cm

ほのぼのとあかしの浦のあさぎりに

しまがくれゆく舟をしぞおもふ

古今集卷九の羈旅歌であるが、柿本人麿の作歌として人口に膾炙している。これを、「取_レ此一首 沓冠之字、書_レ愚老所_レ詠瓦礫於其下、依_レ或人所望_二也_一」と記すように、毎句の首と尾に一字ずつ詠みこんで十首としたものである。(後略)

とある。奥に「文明九年閏正月南華野人(印)」と識語が記される。この印章は、岩崎小弥太氏蔵「周文筆蜀山図」賛に押されてゐる鼎形のもの(印文「易相」と同じかと思はれる。文明九年閏正月、兼良は南都に疎開してゐた。しかし、基本資料である『大乘院寺社雑事記』が正月から三月の記事を闕くので、ほとんど動静が分らず、この懐紙はその意味で貴重である。十首は次の如し。

ほかのちりて後にさけとは山かけの桜一木にたれおしへけむ

とのもりのあさきよめせぬ庭をたに払てけりなはるのゆふかせ

蘆屋かた南のかせのよるくはうきねのゆめも見るとそなき

野も山もさみたれになる世の中はなにの草木もしほれさるへき

秋風やまたしのゝめにたつたやまゆふつけとりのこゑのすゝしき

庭の雪をふみわけてこそとはさらめけさ水くきのあとたにもなし

敷しまの道はひさかたあらかねの神の御代より君か代までに

くれなるのいのりのしるしきえぬともおもひつけてし色はわすれし

ふしのねのはちはかりをかさぬとも思はなをやうへにきえなむ
ふるさとの空やはかはるおもひ出よあつまのかたにありあけの月